

新書紹介

リハビリの友へ

柴田哲夫 友愛ともの会

径書房 B6判 一七一頁 一三〇〇円

脳血管障害（脳卒中）は、長く日本人の死因の第一位を占めていたが、昭和五十六年に第一位をがんに譲り、昭和六十年には、がん、心臓病に次いで第三位となった。これは、治療法の進歩と予防の普及により、脳出血の発生率・死亡率が減少したためと考えられる。しかし死に直結しない軽度例の多い脳血栓は、高齢者に多い。また命はとりとめたものの麻痺などの後遺症の残る例は多く、障害が重く寝たきりになったり、社会復帰できずに在宅生活を余儀なくされている人は多い。

横浜市老人リハビリテーション友愛病院は、昭和四十九年に開設された六八床の小規模なりハビリテーション専門病院である。入院患者のほとんどが脳卒

でほしい」という声が高まり、二年後に実現したものである。

第一部は、座談会形式になっており、参加者はともの会の会員と活動を支えてきた柴田医師はじめ病院の職員である。先ず本を出す目的、自分達の体験を通して同病者や家族に、リハビリテーションへの理解と生活のヒントや励ましを与えられたらということが確認される。そして発病の経過、障害者になった苦しみと克服、家族とのかかわり、生活の工夫などが話される。「今度は、私が働くよ」と言ってくれた妻、毎日の夜の散歩に同行してくれた夫など家族の役割は大きい。しかし退院直後は、「病院では優等生だが家では劣等生」「家族には本当の苦しみはわからない」と家族の中で疎外感を持つ時期があり、同病の仲間との交流が心の支えになっていくことがわかる。

この本は、退院後の心の動揺を綴り、お互いの心の支えにしてきたノートが一五冊になった時、「記念の本にしたい、同じ闘病生活を送っている人に読ん

一定の訓練期間を経た後は、日常生活の中で、残された機能を有効に使い、自分のことは自分ですることが大切で、仲間との交流を持ちつつ時間の流れの中で障害が受容されてゆくと助言している。「病気になって基本的に人生観は変わらないが、それが具体的に立証され、自分のものになった」「今まで見えなかった思いやりや感謝の気持ちが見えるようになった」という言葉に、障害受容の積極的な意味を知ることができる。

第二部は、全部で一七冊に及ぶ友愛ノートからの抜粋であり、環境や価値観の違い一人一人の病気との出会い、付き合い方が、生活を通して語られている。「病院にいたのでは本当のことはわからない」と家庭や社会の中で現実を見つめ、自分ができることを模索する姿がある。

第三部は、柴田医師による脳卒中の歴史・治療法・障害の受容についての解説である。またこの中で、アメリカの学者から日本のリハビリテーション医療に対する指摘①急性期のリハビ

リ医療の推進②地域でのリハビリ体制の整備③リハビリ医療の最終目標は、QOL（生活の質）を高めることにおくこと、が紹介されている。

障害受容とは、あるがままを価値あるものとして受け入れること、価値の転換であるとされる。この本は、本人の側からの障害の受容やQOLの向上を語ったものであるが、それはまた周囲の人々の彼らの受容と表裏一体であることを教えられる。この本に登場する自己決定能力を持ち、家族や仲間にも恵まれた人々の外にも、知的な障害があったり、社会的に孤立している人々があり、それぞれの望むQOLがある。それらを理解し援助することが、周囲の人々と専門家にとって重要であり、そのための地域での医療、福祉のネットワーク作り、障害者の主体的な仲間作りが必要である。忘れてはならないのは、人間の回復力と可能性を信じることでありと思う。表紙の「つくしのちぎり絵」が、困難の中で見つけた希望と喜びを語りかけている。

△民生局 平塚由美▽